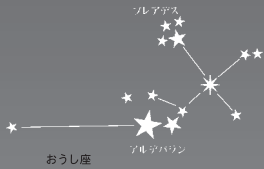


ポラリスを仰ぐ北の大地から



北極星

こくま座

カストル

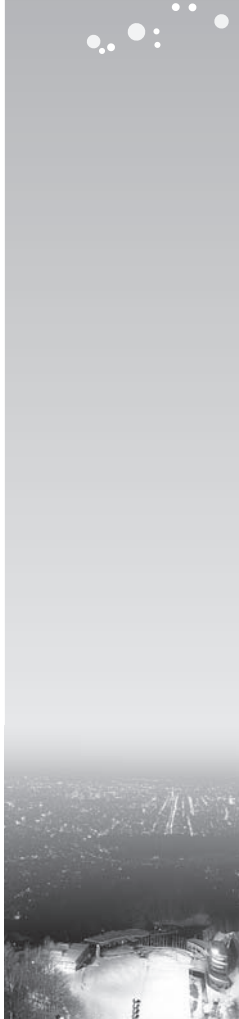
ポルックス

ふたご座

ベテルギウス

シリウス

オリオン座



『其れ恕か』 — 医者悪筆 —

空知南部医師会 会長 梶 良行

診療情報提供書をいただいた。これが読めない。何と書いてあるのか判読できないのである。読解不能。難解な暗号のようだ。いや、暗号でも数字や単語は読めるものだが、顕微鏡でも覗かなければ見えないような小さなボールペンの“奇跡”は、拡大してみても意味不明。まるで速記文字のようだ。そうかと思えば大きな文字だが、極めて独創性の強い文字故、何と読んで良いのか分からない。もしかすると書いた本人も読めないのではと疑ってしまうのである。楷書、行書、草書と書体にはいろいろあるが、医者悪筆“どうでもいい書”には困ってしまう。

文字を駆使するのはヒトだけであるといわれる。その文字を組み合わせる文章は、相手に自分の思いを伝えるために作られる。即ちコミュニケーションの手段である。せつかく書いても読めない文字では、何の意味も持たない。それどころか、読み手に不信感を抱かせることにもなりかねない。相手の気持ちを考え、達筆でなくとも丁寧に書くことこそが肝要である。

先日、女優の岸恵子さんが演じる「わりなき恋」のチケットを購入した。知り合いの若い女性にお願いして郵送していただいたのだが、一緒に手紙が添えられていた。美しい丁寧な文字で「公演を楽しんで欲しい」と記されていた。彼女の真面目で優しい性格が輝いて、私の心は暖かくなった。

「名は体を表す」というが、「書も体を表す」と、私は感じている。上手でなくとも、丁寧に心を込めて書くことが大切である。その姿勢は、医療に携わる者の患者への“思いやり”を反映しているのではないだろうか。偉そうに言ってみたが、果たして自分は大丈夫か。自省の念を込めて、「論語」に見る孔子の教えを肝に銘じたい。『其れ恕か。己の欲せざる所、人に施すこと勿れ。』

消滅可能性都市と夕張

夕張市医師会 会長 中條 俊博

過日、北海道医師会より郵便が夕張市医師会会長宛に届いた。いつもだとプリントされた宛名なのに、これは綺麗な手書きで宛名が書かれていた。嫌な予感がした。当たった。

昨年に続くポラリスの原稿依頼だった。昨年のメ切に間に合わなかった事を反省し、今年は早めに取り掛かろう！と決意したがやはりメ切ギリギリの寄稿となり担当の方にご迷惑をおかけしてしまっている次第である。

今回は我が市で非常に深刻な問題となっている消滅可能性都市について触れてみる。

消滅可能性都市は2040年までに全国の計896の自治体で20～39歳の人口が半減すると日本創成会議が発表し元知事の増田氏が単行本を出し議論を呼んだ。多くの衝撃と同調する意見、反対する意見もあったが、特に北海道は未来日本の縮図とされ北海道をモデルとした地域戦略、人口減少対策が全国的に必要といわれている。

7月初め総務省は道内人口が17年連続で減少と発表。就職先や進学先を求めるなどして転出する人が転入者を上回る「社会減」に歯止めがかからず、減少数は3年連続で都道府県別で最多となった。一方、札幌市の「社会増」は全国の市区町村で最多を記録した。東京など道外への流出と札幌への一極集中が同時に加速していると新聞に書いていた。消滅可能性都市は全道の市町村78%がこれに該当し、全国1位ではないが極めて高い位置にある。夕張市は消滅可能性都市全国7位で市としては1位であった。夕張市が人口1万人を切った時にはマスコミを騒がせたが、それからわずか2年足らずの7月1日現在9,279人である。わずか2年で700人(約7%)もの人口減少である。このままでは自治体の消滅は避けられず、まさに消えゆく運命にあるのではと考えてしまう。もちろん人が一人もいなくなるわけでもなく、夕張メロンが全く無くなるわけではないので、患者がいる限りは全力で診療にあたらせようと頑張っているが、10年後、20年後を考えると不安が募るばかりである。